

向山陽子

「サンタクロースつているんでしようか」

——子どもの質問に答えて——

中村妙子訳・偕成社

今の私に「本を一冊あげてほしい」と問われたら、季節も、問う人の年齢も何もとびこえて、この本をおすすめします。

一八九七年九月二十一日、ニューヨーク・サン新聞の社説です。『真夏にサンタクロース!』と思われた方、私だって真夏の号にこの本をとりあげるのには勇気がいりました。でも、この社説が載ったのも九月だったのです。

何年か前、大学のブレイルームで、訳者の中村妙子さんが読んでもらったのを耳にしてから、読んでも、耳で聞いても、心に暖かいものをどせる幸せに浸りたくて、声を出して読んでみます。とびきり心をこめて。

「サンタクロースつて本当にいるの?」と新聞社に投書した八歳の女の子。

「新聞社にきいてごらん。新聞社がいるといつたら、そりや、本当にいるんだろうよ」と娘に答えた父親。

この投書をとりあげた編集長。

大人として真剣に、真正面からこの問い合わせに答えた新聞記者。

そして、今では、この社説は古典のようになって、クリスマスの季節になると、アメリカのあちらこちらでくり返し掲載されているという事実。

アメリカから帰つていらして、日本で訳されていないと知り、びっくりして、いても立つてもいられず訳しました、とおっしゃった中村妙子さん。

これらなどの一つをとつてみても、「やつぱり人間つていいな」と思えるのです。

19世紀末の物質文明、合理主義の風潮が強まる中で書かれたこの文章を、20世紀末の今、21世紀に生きていく子ども達、大人達に是非読んでほしいものです。

